平成２０年度　第２回　市史を読む会
「青野川水源池計画の黎明―青野ダム前史―」について

平成２０年１１月８日（土）、まちづくり協働センターにおいて神戸大学准教授の河島真さんを講師にむかえて第２回市史を読む会が開かれました。

今回のテーマは、太平洋戦争前を中心とする青野ダム計画の経緯についてです。これまでに市域で見いだされた史料からは、戦前の経緯を明らかにすることは困難でした。しかしこのたびの市史第６巻（近代資料Ⅱ）の編さんに際しての河島氏の調査を通じて、一連の動向に関わる公文書が阪神水道企業団に多く保存されていることがわかりました。そして今回、企業団および神戸市のご厚意を得て同書にその一部を掲載することができました（３章１節「武庫川水系の水源池問題」）。

そもそも青野川・黒川を水源池とする計画のはじまりは神戸市によるものでした。神戸市は増大する人口に見合った水を確保する必要から、大正１０年、昭和７年にそれぞれ千苅水源池を水源とする上水道の拡張を完了させました。しかし予想を超える人口増加と市域拡張のため、さらに昭和８年、この地を水源池とする計画を決定したのです。一方で現在の尼崎市から芦屋市にかけての地域に水道を整備する計画が兵庫県を軸として進んでおり、その水源の一つとして「青野川水源池」が注目されたのです。つまりこの時期、阪神地域の水がめの一つとして当地域は注目されていたのです。その後、神戸市の青野川水源池構想は神戸市も加入した阪神上水道組合（現企業団）に継承されましたが、給水コストなどの課題から計画はすぐには実現されず、結局昭和４２年前後に北摂丘陵開発構想の一環を担う水源地としての県営青野ダム建設計画へと衣替えをうけて、昭和６３年に竣工を迎えたのです。

青野川水源池の史料は、我々の暮らしと水との関わりをも教えてくれます。昭和１０年に青野川水源池計画を神戸市会が決定したとき、武庫川下流域の市長らが築造反対の陳情書を兵庫県知事に提出しました。その内容は、上流で取水されると下流の灌漑用水に困る（史料 141）といったものでした。一方、三田市域では予定地となる中野村から人々の信仰面まで踏み込んだ生活補償への配慮を切実に要望（近代資料Ⅰの史料 154）しているほか、水量の減少を憂慮した三田町や三輪町は、上水道への無料配水などの配慮を要望しています（同 155、近代資料Ⅱ147・148）。

水は人の暮らしに欠かせません。だからこそ限られた水の利水をめぐって利害が交錯することもあります。とりわけ水源と位置づけられる上流の地域住民の生活補償と、ダムの恩恵を受ける下流の地域との矛盾をはらんだ関係を忘れてはなりません。史料を通して水の確保をめぐる先人の努力や苦労に触れつつ、普段目にする武庫川の水や蛇口の水の尊さを見つめ直したいものです。また水害・戦争や震災を乗り越えて保存されてきた公文書が市域の歴史を明らかにしてくれたことを考えるとき、公文書を保存することの意義や重要性についても改めて感じさせられます。

（三田市史編さん担当）